

# しらかべ



2019年3月19日 人権・同和教育部発行

春暖の候、保護者の皆さま方におかれましてはご健勝のことと存じます。今年度も本校の人権・同和教育にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。そして、「しらかべ」をお読みいただいた感想や本校の人権・同和教育の取組についてのご意見などを懇談で返信いただき、ありがとうございました。来年度も変わらぬご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



## ✦ 自分と向き合うお茶の時間～本校生の読書感想文より（一部抜粋）～

日々の雑踏の中で、何かにつけ一喜一憂する私。しかし、木曜日の放課後だけは、少し違う時間の流れがある。現在、茶道部に所属している私は、共感を求めてこの本を手にとった。ところが、そこには共感を遥かに超えた驚きや学び、また感動の世界が広がっていた。作者でありこの本の主人公でもある森下さんは、20歳の春に初めて「お茶」の世界に出会った。日々抱えている悩みや不安と向き合うなかで、気づけば、そこに「お茶」があった。そんな「お茶」を通して得た様々な気づきを「15のしあわせ」として教えてくれているのが、この本である。

まず、「知る」ことの幸せを森下さんは私に教えてくれた。それは「『自分は何も知らない』ということを知る」ことである。何を今更、当たり前のことを、と思うかもしれない。しかし、私は、なかなかこのことができていないように思える。なぜなら、何に対してでもそうだが、分かっていないのに、分かっている振りをしている自分がいつもどこかにいるからだ。初めてのことなら自分が知らないのは当たり前なのに、それを恥ずかしいことだと思いついてる。森下さんの「知る」を通して、改めて「知る」こと＝自分が変わることを考えさせられた気がした。ひどく邪魔で醜いプライドなど捨てて、「ゼロ」の自分を開いて、習うことが今の私に必要なだと感じた。

私の茶道の先生も、お茶にまつわることに限らず、様々な知識を教えてください。掛け軸の解釈や茶道を通して互いを思いやる心など、私の知らないことばかりである。すぐに覚えられないことが多い中で、特にどうしても理解しきれないことが一つある。「目で次の動作を探すんじゃない。頭じゃなく手が先に動くんだろ」と、静寂の中で響く先生の声。何を言っているんだ、頭で考えないって一体どういうことなのか。その答えをお稽古の度に考えては迷走していたのだが、森下さんに大切なヒントをもらった。それは、「自然にわかるのを待つ」という姿勢である。一見、「知る」ことの幸せとは矛盾するようにも見えるが、時間をかけていつか「分かる」日がくるのを待つのも茶道の大きな楽しみなのだと気づかされた。茶道を通して「知る」ことの奥は深い。

ちなみに、私のお茶の先生は年配の男性の方である。先生ご自身も、男性でお茶をたしなむ人は少ないとよくおっしゃる。しかし、そもそも茶道は、男性社会のものだったとも話して下さったことがある。茶道は本来、死と隣合わせの武士が「無」になる時間を求めたことが始まりである。日常に命の駆け引きがある中で、茶室は無になれる唯一の非日常的空間だった。今の私たちからは想像もできない世界だが、私だって日々の生活に「忙殺」されている一人だ。期限が決められた課題に追われ「必死」でそれをこなしている。そう考えると、私が週一回のお稽古をどこかで心待ちにしていることも納得できる。私もかつての武士と同様に、非日常であるお茶室に「無」を求めているのではないだろうか。お稽古をしている時だけは、お茶を点てることだけに「心」を入れることができる。森下さんも、抱え込んでいるタスクが多いと、お茶なんか点てている場合じゃない、と悶々として今にも走り出したいくなっている。しかし、お茶を点て出すと、その一碗だけに集中し、他に思いを巡らせることなど何もない。そしてそれは、誰かのお点前を見ているときも同様である。本の中に、「その時私はどこへも行かなかった。100%ここにいたのだ」という一文がある。まさにその通りだった。忙しく過ぎていく日々のなかで、自分というものを見失いそうになる。しかし、この「お茶」の世界にいる時だけは、

自分という存在が確かなものである、と実感できる。

「日日は好日」-どんな日もその日を味わう。悲しいときはたくさん泣き、楽しいときには思いっきり笑う。それは、どんな時の私もその時の私として精一杯生きることにつながる。堅苦しい作法を覚えるだけだと思っていたお茶の世界は、私をいつも受け入れてくれる第二の家のような存在になった。文化祭では浴衣で月見茶会を開き、初釜では先生が買って来て下さる花びら餅にうっとりする。四季を味わう心を育てながら、その日を全力で生きようと思う。坂出高校茶道部で活動できるのもあと約一年半。短期間で得られるものは少ないかもしれない。しかし、焦らず自分で一つひとつ気づきながら答えを見つけることが成長につながる。お茶を友とし、自分の中の季節を日々感じながら生きていきたい。

## 1年生3学期の人権・同和教育LHR

2学期は「ハンセン病回復者をとりまく問題」について、LHR運営委員が8月に実際に訪れた大島青松園での学習成果をもとに差別について学び、考えました。そして3学期は、障がい者スポーツの世界についての講演会が開催され、新しい視点から障がい者差別について考えることができました。

またインターネットと人権について、「あの空の向こうに」という短編ドラマを視聴しました。あまりにも携帯電話、スマートフォンが身近なものになってしまい、その危険性についてどうしても注意が薄れがちです。自分自身が、加害者にも被害者にもなりえることをいつも心に留めていなければなりません。

### 🌟 ～障がい者をとりまく問題について考える～

オリンピック・パラリンピック教育を推進する推進校に指定されている本校において、1月16日に車いす陸上選手の副島正純（そえじま まさずみ）さんを招いて、「挑戦～今、私にできること～」と題した講演を行いました。副島さんは、23歳の時、事故により車いすの生活となりましたが、入院中に障がい者スポーツと出会い、車いすマラソンを開始され、アテネパラリンピックでは、1600mリレーで銅メダルを獲得されました。その後、4大会連続でパラリンピックに出場され、現在も車いすマラソン選手としてご活躍されています。



講演会では、実際の車いすマラソンの様子を見たり、競技用の車いすを体験したりすることができ、パラリンピックや障がい者スポーツについても興味が湧きました。また、目標に向かって前向きに努力される副島さんの姿を見て、自らを振り返ることができました。

以下に、生徒の感想の一部を紹介します。

- 怪我をしてしまうことで不自由なことが多くなるけれど、考え方次第で自分の人生を大きく変えることができるのだと思いました。副島さんがパラリンピックに出場されるのを応援したいです。
- 怪我をした副島さんを前向きにしたのがスポーツであると聞いて、スポーツには人を笑顔にする力があると改めて感じた。自分の好きなこと、目標に向かって、向上心を持ち必死になって、「今」を生きている副島さんに感動した。
- これからの人生、何が起こるか分からないと思います。しかし、それでも負けず生きていく副島さんは本当にすごいと思います。一つひとつの生きている時間を大切に過ごし、目標をたくさん持って歩いていこうと思います。
- 副島さんの姿を見て、障がいのある人に対して、自分は何かができるのだろうと考えました。もっと障がい者スポーツを知り、積極的にボランティアに参加して、人の役に立てるようになりたいと思います。

1年間ありがとうございました。来年度も人権・同和教育の学習をしっかりと続けていきます。